を服して顔色玉女の如く、水に入つて霑はず、火に入つても灼けなかつた」とあるが、そこまで行つては何如に五味子が靈薬でも贔負の引倒し位では済まされまい。まだある千金方には又「陽事不起には、新五味子1斤を末にし、1日3、4回酒で方寸匙を服むとよい、但し、猪、魚、蒜、醋を忌む。一剤を尽く服すれば百日に亙つて十女を御し得る効がある」と書いてある。「邦産薬用植物」には北五味子は、成熟せる果実を採集して乾燥したるものなり。本品は暗赤色又は暗紫色を呈し、屢々類白色の粉層を被り、著しく皺縮し質は柔靱にして内に2個の種子を包藏す。本品は酸臭あり酸味強く稍甘し。漢方、北五味子は專ら強壮並に鎮咳薬とする。と出ている。

天門冬　クサスギカズラ

主として海辺の地に生ずるユリ科の多年生草本で、根茎は短形、多数のダリヤの薯のような紡錘形根を叢出している。アスパラガスの類であるからよく似ているが、上部は他物に巻き付く。本草綱目には「骨髄を強くし、三虫を殺し、伏尸を去る。久しく服すれば身体を軽くし、気力を益し、天年を延べ、飢えることがない」とあり、又「腎気を通じ、消渇を止め、熱中風を去る、湿疹を治するには久しく服するがよい。煮て食えば肌体を滑沢にし、色を白く浄かにし、身体上の一切の悪気、不潔の疾を除く」とある。猶禹錫曰く「山中生活に入つた時は、天門冬を蒸し、煮て食うがよい。それで充分穀食を断ち得る。若し努めて是を服食するには散にして酒で服すればよい。或は搗汁を膏にして服するもよい。百日継続すれば、体力壮健になること求（オケラ）や黄精に倍する。二百日継続すれば、筋髄を強くし、顔色を移ろはしめぬ。煉つた松脂と共に蜜で丸にして服するば更によい。杜紫微は、これを服して80人の妾を御し、140才の長寿を保ち、1日300里（邦里50里）を歩行した」とも出ている。又列仙伝には「赤松子は、天門冬を食つて一旦落ちた歯が再び生え更り、髪がまた生えた」とある。服食法は、8、9日天門冬の根を採り、曝乾して末とし1日3回、方寸匙ずつ服すとある。天門冬を服食した時は、鯉を食う事を忌むと云う事である。天門冬を服して50日に達すれば、奔馬に追い付くことが出来ると云うが、これはホンマではあるまい。「邦産薬用植物」には天門冬はクサスギカズラの根を採集し乾燥せるものなり。本品は略紡錘形をなし両端漸尖、長さ大約5～10糎、外面は類褐色半透明にして質柔軟なり。味は稍苦し。漢方、天門冬は鎮咳、利尿及強壮薬とす。と簡単に片付けてある。

菟糸子　ネナシカズラ

ネナシカズラはヒルガオ科の一年生の寄生草本で、茎は黄色無毛で糸状をなしている。芽生えの時は根があるが成長して宿主にからみ付くと根を失つて仕舞う、茎は左巻である。牧野博士は菟糸子はマメダオシに当てるべきだと云はれるが、茲では漢薬としてはネナシカズラを菟糸子として使つているので、それに従うことにする。この菟糸子も本草綱目には中々大した効能を挙げてある。即ち「菟糸子は肌を養い、陰を強くし、筋を堅くし、茎中寒して精の自ら出るもの、口が苦くて躁渇するもの、寒血で積となつたものに主効がある。久しく服すれば、目を明かにし、身体を軽くし、天年を延べる」とあるし、又「男子、婦人の虚冷を治し、精を添へ、髄を益し、腰疼、膝冷、消渇、熱中を去る。久しく服すれば、面黒を去り、顔色を悦沢にする」ともある。用法は「陽気の虚損には菟糸子（ネナシカズラの実）と熟地黄等分を末にし、酒類で梧子大の丸とし、50丸ずつ飲む。気虚には人参湯で服し気逆」には、沈香湯で服す。とある。「邦産薬用植物」には菟糸子はネナシカズラの種子を採集せるものなり。本品は赤褐色又は暗褐色を有する略心臓形の粒子にして直径2粍に過ぎず、其100粒は重さ約0.75瓦なり。本品は気味緩和にして油様なり。成分は種子牛に樹脂様配糖体を含有す。漢方、菟糸子は強精及強壮薬とす。1日用量8瓦、煎剤とす。民間、茎の搾汁を顔に塗れば面黒を去ると云う。と出ている。

黄　精　ナルコユリ

此薬草も当然ここに加えるべきであるが之は前回山の植物食べ歩記」に書いたから若し読者御見落しの節は、それを御読下さい。

新刊紹介

生物実験ノート

兵庫県生物学会編

生物を研究するには書物を読み、先輩の話を聞くことも必要であるが、実験、観察をすることが更に必要である。ほんとうに生物を理解するには、自分で生物を観察し、実験して初めて目的を達成することができる。それには適当な手引が必要である。今までに生物実験の手引書がたくさん出版されているが、すべて大部冊のものばかりである。殊に、高校、中学校などの生徒実習用としては適当なものがない。

それで生徒むきの実験手引書をわれわれ一同で作ろうということになり、主として、県下高校の先生方に、最低限度の実験事項を撰択して戴き、各事項に10人ずつの先生方が加筆消滅して原稿を作製した。更に阪神間の先生方16人を委員にあげて、各專門の分野の整理をして戴き、数回の会合の結果、文の統一などをして発行した。

A5　33ページ、定価35円、送料8円、昭和30年6月発行　発行所　数研出版株式会社（京都市中京区富小路二条上ル）